

注目! 日本発のサックス・マウスピース
Contemporary Jazz Magazine

第33巻第5号(通算第379号)
平成21年5月14日発行
(毎月1回14日発売)

jazzLife

短期集中ギター講座: **マイナー・ブルース制覇**

2009
MAY
定価 880円

【スコア】

マイナー・ムード
バーニー・ケッセル

**リズムニング
ヴァルス・ホット**
フランフォード・マーサリス

フライド・ハイズ
エリック・アレキサンダー

**オン・グリーン・
ドルフィン・ストリート**
マイルス・デイヴィス &
ジョン・コルトレン

ティーン・タウン
フライアン・ブロンバーグ

【総力特集】

低音 PIZZICATO

フライアン・ブロンバーグ / スタンリー・クラーク / エスペランサ
ラリー・グレナディア & レベッカ・マーティン / 納浩一 & 布川俊樹

【春のサックス特集】

2009年・サックス春の陣

近藤和彦 / ボブ・ミンツァー・クリニック
音川英二 & 粥川なつ紀 ~ この春話題のサックスアルバム

【注目の周辺機器】

エレベとアコペで試す最新ベース・アンプ
Masterpiece Jazz Guitar: ディアンジェリコ

大野雄二 & 今井美樹 / マリーン & カルロス菅野 / キャンディ・ダルファー
ロバータ・ガンバリーニ / マイク・マイニエリ / ブラッド・メルドー・トリオ
デイヴィッド・フュージンスキー / ポーリン・ウィルソン(シーウインド) / 吉田次郎

スチュイ・フォン・ワッテンヴィル

エリック・アレキサンダーは、ひとつの音を聴いただけで彼だとわかるサウンドを持っている

取材：早田和音 写真提供：バウンディ・ジャズ・ライブラリー

ヨーロッパにおいて、アメリカン・ポップ・スタンダードを突きつめるスチュイ・フォン・ワッテンヴィル(p)が、ジャズ・テナーの王道を突き進むエリック・アレキサンダーを迎えて行なったライブが、その熱気のままCDに封じ込められ、リリースのはこびとなった。ワン・ホーン・クアルテットの真髄とも言えるこのライブ作品について、スチュイに聞いた。



スチュイ・フォン・ワッテンヴィル●プロフィール

1962年、スイス生まれ。幼少の頃からピアノに親しみ、後にベルン音楽院で正規のピアノ教育を受ける。音楽の興味がジャズに移るとともに、1990年からは本格的な音楽活動を開始。アート・ファーマー、クラーク・テラーらアメリカの巨匠との共演を経て、ヨーロッパにおけるアメリカン・ポップ・スタンダードのスタンスを確立した。エリック・アレキサンダーとの共演も長きにわたり、2003年の「ライブ・アット・パース・アイ」でのコラボも高い評価を受けている。http://www.stewyvonnwattenwyl.ch



「ライブ・アット・マリ
アンズ」
スチュイ・フォン・ワッ
テンヴィル・フィーチャ
リング・エリック・ア
レキサンダー
バウンディ・ジャズ・ライ
ブラリー
(B.J.L.)DDCB-13008
4/22発売

- 収録曲 ● ①フライド・バイズ ②モーメント・ノーティス ③
オール・ザ・ウェイ ④テレストリス ⑤ヴェリー・アーリー ⑥
ソニー・フォー・トゥー ⑦オン・ザ・トレイル ⑧スタ
ンズ・ジャップル
- パーソネル ● スチュイ・フォン・ワッテンヴィル(p)、レジ
ー・ジョンソン(b)、ケヴィン・チェスマン(ds)、エリック・ア
レキサンダー(ts)
- 録音 ● 2008年1月18日&19日、スイス・ベルン「マリ
アンズ」ライブ録音
- スチュイ&エリックによる熱狂のネオ・ハード・ポップ・セ
ッションをライブ収録

エリックと演奏する時には 事前に曲を決めることはない

—ピアノやジャズとの出会いについてお聞かせください。

スチュイ・フォン・ワッテンヴィル(以下SVW)：
自宅のリビング・ルームにピアノが置いてあったので、その音色に魅せられるようにして、幼い頃から耳で覚えた曲を自然にピアノで弾いていた。正式なレッスンを受けるようになったのは7歳から。クラシックの先生に習っていたけれど、17歳の頃から書かれたことだけを演奏することに対して疑問を感じるようになって。そのうちに、音楽的なエネルギーや自由をブルースやジャズの中に見出し、次第にジャズへと興味移っていった。その頃はジャズを教えてくれる人が周りにいなかったの、レコードを聴いてその音を取っていかねばならなかった。ずいぶん苦労した覚えがある。

—あなたが影響を受けた音楽といえば？

SVW：僕の若い頃はエキサイティングな音楽がたくさん生まれてきた時代だったから、その中で自分に影響を与えた音楽を特定するのはとても難しい。ブルースやファンク、ラテン、ジャズなどいろいろな音楽を聴いてきたけれど、チック・コリア(p)やバコ・デルシア(g)、ハービー・ハンコック(p)、エディ・バルミエリ(p)、ウェザー・リポート、ジョー・ファレル(woods)が特に好きだった。それに、B.B.キング(vo.g)も。そんな中で私に最大の影響を及ぼした経験は、1982年のモントルー・ジャズ・フェスティバルでミシェル・ベトルチアーニ(p)の演奏を目の当たりにしたこと。度肝を抜かれると同時に、どうしたらあんな凄い演奏ができるのか知りたくなった。その後ある雑誌で、彼がバド・パウエル(p)やビル・エヴァンス(p)、オスカー・ピーターソン(p)の音楽を研究したと語っているインタビュー記事を目にした。それを読んで、パウエル、エヴァンス、ピーターソンを研究し始めた。ジャズの伝統に深く入り込んでいけばいほど、自分の尊敬するプレイヤーのアイディアやエネルギーの源を探ってみようという思いは強くなる。その結果その先を知りたくなるわけだから、これは尽きることの

ない道程のような気がする。

—最近はどのような音楽を聴いていますか？

SVW：もちろん現代のヨーロッパやアメリカのジャズ・ピアニストの演奏には興味を持っていますし、よく聴いている。また同時にバッハやストラヴィンスキーといったクラシック音楽も大好きだ。その他に、ニック・ペリンというギタリストと一緒に、ジャズや、タンゴ、ポップス、ボサ・ノヴァ、フラメンコ、ヨーロッパの古典音楽をひとつの音楽に融合させようという活動も行なっているので、スペインやブラジル、アルゼンチンの音楽もよく聴いている。そして、最近ではアコースティック楽器だけを用いたソロやデュオ、トリオなどの小編成の演奏に興味を湧かせていて、フラメンコ・ギターやヴァイオリン、チェロ、コントラバスの音色に魅せられている。

—それでは、ニュー・アルバム「ライヴ・アット・マリアンズ」について伺います。今回の選曲はどのように？

SVW：特に明確なコンセプトがあったわけではなく、本当に好きな曲を選んだという感じ。エリック・アレキサンダー(ts)と演奏する時には事前に曲を決めるということはせず、ライブの数時間前に好きな曲を出し合いながら決めていく。面白いことにふたりとも同じような曲を持って来るので、曲目はいつもすぐに決まってしまう。

—ビル・エヴァンスの「ヴェリー・アーリー」を演奏していますね。あなたのピアノに対してエヴァンスの影響を指摘する声もあります。

SVW：いろいろな人達からエヴァンスからの影響を指摘されるけれど、実際はそれほど頻繁に彼の作品を聴いているわけではない。それでも彼の演奏のコードや色合い、感触は大好きだ。自分としては彼からの直接的な影響は少ない気がする。ただしエヴァンスに影響されたエンリコ・ピエラヌツィ(p)やペトルチャーニ、ケニー・ワナー(p)をよく聴いているので、彼らを通じて間接的にエヴァンスの影響を受けているのかもしれない。

—ベースのレジー・ジョンソンとドラムのケヴィン・チェスマンを紹介してください。

SVW：レジーとは過去にも何度か共演する機

会があったけれど、5年くらい前からは、特に頻繁に共演するようになった。ヨーロッパを拠点としているアメリカ人ベーシストとしては最も経験豊かなプレイヤー。とてもファンタスティックな演奏をしてくれる。ドラムのケヴィンは、彼がまだ17歳でジャズ・スクールの学生だった時に知り合った。その頃から素晴らしい演奏をしていて、初めて聴いた瞬間から彼の演奏が気に入ってしまった。彼と演奏するのはとても楽しい。若いけれどアイデアを豊富に持っているし、またそれを正確に表現するだけの技術も身に付けている。

アメリカで起こっているジャズに対して、より強い関心を持っている

—今回のフィーチャリング・ゲストであるエリック・アレキサンダーとは、どのようにして知り合ったのですか？

SVW：初めてエリックと演奏する機会を得たのは、1999年のこと。彼がツアーでスイスを回っていた時、バンドのピアノに欠員が出てしまい、急遽僕がその代役を務めることになった。そうしたところ、それがとても好い演奏になったんだ。翌2000年に、今度は僕がエリックをツアーに誘った。それが彼と僕との長い付き合いの始まりだ。

—このアルバムでは、エリックが最近の彼自身のアルバムよりスウィングにプレイしているように感じます。

SVW：そのことについては僕も同じように感じている。それには3つの理由が考えられる。まず、ひとつ目には、これがライブ・レコーディングだという点。良いミュージシャンは観客を前にした方が良い演奏をするものだ。2番目の理由としては、彼がヨーロッパで演奏しているという点。ニューヨークの空気とは違う空気を吸って、開放的な気分になっているのだと思う。それから3番目の理由。そしてこれが最大の理由だけど、それは彼をバックアップするミュージシャンが素晴らしいからだ(笑)。

—エリックの素晴らしい演奏を言葉で表現すると、どのような感じでしょうか？

SVW：彼は最高。自身のアルバムも多数リリースしている他、数多くのビッグ・アーティスト

とも共演している。ジャズ界のMVP(Most Valid! Player)と言っていいだろう。彼のサウンドは大きく力強いものだけど、それと同時に温かさにも溢れていて、ひとつの音を聴いただけで彼だとわかる明確なサウンドを持っている。どのような複雑なアレンジにも対応することができ、いつでもベストの演奏をする優れた音楽家だ。また彼の尊敬できる点は、プレイヤーとしてだけでなく、人間的にも素晴らしいという点。あれだけビッグになっても謙虚な人柄は昔のままだ。

—エリックとは度々共演していますが、おふたりを結びつけるものは何でしょう？

SVW：やはり、同じテイストを持っているということが大きい。彼も僕も、身体を踊らせるような軽快なテンポとスウィング・リズム、そしてブルー・ジューなフィーリングに溢れたアメリカのスタンダードが大好きなんだ。そして、ふたりを結びつけるもうひとつの理由がある。僕たちはふたりともスキーが大好きでね。いろいろな点で気の合う友人だ。

—最後の質問です。現在のジャズに対してどのようにお考えですか？

SVW：最後に難問が来たね(笑)。現在のジャズって何だろう？ ジャズはアフリカ、ヨーロッパ、ラテン、アジアの各大陸の音楽がお互いに影響し合いながら発展してきたものだ。しかし今ではこれまでのような大陸による差異だけでなく、さまざまな面から発展の要因が発生している。現在のジャズの新たな要素としてはラップ、ポップス、ロックの他、チベットの宗教音楽や読経、インドのラーガ、レゲエなども挙げられる。グローバル化の波は経済だけでなく、文化芸術の面にも確実に押し寄せてきていて、多種多様なジャズが生まれつつある。たとえばもしヨーロッパの人々が「ジャズ」をイメージした場合、たとえそれがスウィングでなく、またブルー・ノートを用いていなくても、即興音楽でありさえすればそれはジャズであると考えられるかもしれない。しかしジャズは元々アメリカで生まれた芸術様式だ。だから僕はアメリカで起こっているジャズに対して、より強い関心を持っている。そしてそのアメリカのジャズ界で近年起こりつつある大きな変化の

ひとつが変拍子の導入だ。現在数多くのプレイヤーがさまざまなスタンダードに対して、5拍子や7拍子、11拍子による演奏を試みている。それはそれで面白い試みではあるけれど、聴く側からすれば、わかりにくいという側面もある。オーディエンスの側から考えると、最近のジャズは複雑になりつつあるという気はする。

—それでは、日本のファンへ一言お願いします。

SVW：なるべく早く日本に行きたいと思っています。僕が一日も早く来日できるよう、皆さんジャズ・クラブやラジオ局、ジャズ・フェスティバルへ、どしどしリクエストしてください(笑)。



左から、ケヴィン・チェスマン(ds)、エリック・アレキサンダー(ts)、レジー・ジョンソン(b)、そして、スチュイ・フォン・ワッテンヴィル(p)

●54ページからは、アルバム「ライヴ・アット・マリアンズ」に収録されている「フライド・パイズ」から、エリック・アレキサンダーのテナー・サクソフン・ソロをスコア掲載しています。

ウェスのファンク・ブルースを軽快にライブで熱演

「フライド・パイズ」

FRIED PIES

played by ERIC ALEXANDER(ts)

スイス生まれのハード・バップ系ピアニスト、スチュイ・フォン・ワッテンヴィルのトリオにサクソ奏者エリック・アレキサンダーが参加して、昨年、スイスでライブ・レコーディングが行われた。そのアルバム『ライヴ・アット・マリアンズ』から、ウェス・モンゴメリー作曲の「フライド・パイズ」のエリックのテナーのプレイを取り上げた。

▲全体がテーマだが、12小節の変型ブルース・フォームに、1回目と2回目で異なる8小節のタ

グが付く形、つまり、A(12)-B(8)-A(12)-C(8)の計40小節で構成されている。

■からエリックのソロ・パートで、ここからはタグの部分は省略され、12小節単位のブルースで繰り返されている。ここでは冒頭から4コーラス分を掲載した。

ここまでのフレーズを見てみると、ブルース・ペンタトニックを使用した比較的平易なフレーズが多いが、その中に交えられるテンションの使い方にひとつのクセが見られる。例えば■の10

小節目のように、同じコード内で13th、9thというナチュラル・テンションから、b13th、#9thというオルタード・テンションに移行し、そして次のコードに進行する形だ。これは■の3～4小節目にも見られる。

また、各コーラスの9小節目は、D7のb13thであるB \flat 音がいいつも強調されているが、4コーラス目にあたる■の9小節目では、バックのコードもそれに反応した形をとったと思われる。インタープレイの妙である。

T. Sax in B \flat

FRIED PIES played by Eric Alexander

The musical score for "Fried Pies" by Eric Alexander is presented in a standard guitar notation format. It consists of 12 staves of music, each with a key signature of one sharp (F#) and a common time signature (C). The score is divided into two systems of six staves each. The first system (staves 1-6) is primarily in the treble clef, while the second system (staves 7-12) includes both treble and bass clefs. The notation includes various guitar-specific elements such as triplets, sixteenth-note runs, and slurs. Chord diagrams are indicated by letters in boxes above the staff lines, and chord names are written above or below the notes. The chords used include G7, C7, D7, A7, A7b7, C, D, E, Bbm7, F7, Em7, and Am7. The piece concludes with a final chord of D7.